

氏名(本籍)	野口 幸美(滋賀県)
学位の種類	修士(看護学)
学位記番号	修士第68号
学位授与年月日	平成18年3月24日
学位論文題目	NICUで「触れる」ことから小さな赤ちゃんを“わが子”と母が実感するプロセスの研究

## 論 文 内 容 要 旨

※整理番号	70	(ふりがな) 氏 名	の ぐち ゆき み 野 口 幸 美
修士論文題目	NICUで「触れる」ことから小さな赤ちゃんを“わが子”と母が実感するプロセスの研究		
<p>研究の目的</p> <p>母が NICU で面会時に小さく生まれた子にどのように触れていくか、というプロセスを明らかにすることである。</p> <p>方法</p> <p>半構成面接法を用いて超低出生体重児を出産した7名の母からデータ収集をし、グラウンデッド・セオリー・アプローチの継続比較分析を行った。</p> <p>結果および考察</p> <p>面接内容を母の子に触れた行動を主軸に、意味のある文節に区切ってコード化し、合計 1273 のコードを得た。分析の結果、【「触れる」ことから、小さな赤ちゃんを“わが子”と実感する】プロセスを中核カテゴリーとして導き出し、7つのカテゴリーと、18のサブカテゴリーが抽出された。</p> <p>〔トラブルを抱え妊娠中を過ごす〕は、母が超低出生体重児の子を出産することになるまでの妊娠中に何らかのトラブルを抱えている様子で、＜出産への期待とあきらめをもち＞、＜妊娠継続の不安＞をもちながらも、一日でも長く、自分のおなかの中に子をおいて＜おなかの子の成長を待つ＞ていた。〔急な出産に気持ちを切り替え、合わせようとする〕は、出産に急に臨まなくてはならなくなった状況に、気持ちを合わせようとする母の様子で、＜最善の方法として出産を選択しないといけない＞ことに戸惑い、出産に臨むが＜通常の出産とは違い、生んだ後の安堵感がない＞ままだった。〔物理的に離れているが、子にもっと近づこうとする〕は、子は NICU に入院し、出産後一緒に過ごすことはできないが、母は自分の子に近づこうとする行動で、早産での出産や、子と離れ離れの状態の＜つらい気持ちの打開策を模索する＞。〔実際に子と一緒にいない生活をする〕は、出産後に子は NICU に入院しており、実際に一緒にいない生活をする様子で、母は、＜産後、NICU に子をあずける＞ことで、＜私にしかわからないつらさがある＞と思いながらも、＜母としてやるべきことをする＞ために、面会に行き、＜面会で子に会えるうれしさと不安に揺れる＞。〔周囲からの支援に励まされる〕は、医療者や家族の支援に励まされる様子で、医療者や家族に対し、＜反発する思いも抱えているが、励まされ＞、＜自分自身が頑張らないといけませんが、まわりにも助けられる＞。〔気持ちの葛藤をもちながら子に触れる〕は、母が自分の子に触れることになっても気持ちの葛藤を持つ様子で、＜子に触れたい気持ちもある＞と同時に、＜子に触れることをためらう＞。そして＜促されて子に触れてみる＞。〔子に触れて、わが子を実感する〕は、母が子に触れることで子をわが子であると実感する様子で、＜子にしっかり触れることができる＞ようになり、＜人に言われ、小さいと改めて実感＞しても、わが子であるという実感は揺るがない。</p> <p>母と子の早期の接触は、母が妊娠中から出産をとおした様々な経験や思いに折り合いをつけていなければ、NICU スタッフが意図した早期接触の意味はなさない。母は子が大丈夫であると確認できれば、触れたいと思う、その気持ちを大切にすることが重要である。</p> <p>総括</p> <p>母が子に触れるということは、母が子を目の前にして、手を伸ばして子に「触れる」という単純なものではなかった。「触れる」ということは、妊娠中から始まっていて、母が子に少しずつ近づき、子をわが子と実感することで「触れる」、そしてしっかり「触れる」ことで、さらに子を“わが子”であると、実感できるといった、母と子のかかわりの中で生まれていったものだった。</p>			

- (備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。(1200字程度)  
2. ※印の欄には記入しないこと。